スクールカウンセラーによる訪問面接の効果についての検討

玉木健弘

不登校は，これまで様々な分野で問題とされてきた。そのため，不登校への対応についても多くのことがなされてきた。その一つに，スクールカウンセラーの配置がある。これまで，スクールカウンセラーは，学校の教職員と協力して，不登校の児童生徒に対応してきた。そこで，本論文では，不登校生徒への対応の1つである，訪問面接の効果について検討を行った。

[キーワード：訪問面接・不登校・スクールカウンセラー]

I　はじめに

不登校とは，何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため，年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的な理由による者をのぞいたものと定義されている。しかし，学校には登校していなくても，適応指導教室，教育支援センターといった，学外の施設に通えば登校したことになる。また，1時間でも学校に登校すれば，欠席にはならない。このため，不登校については，様々な形態の児童生徒がいると考えられる。

文部科学省(2007)の報告によると，平成18年度における不登校児童生徒数は，小学校で23,824名，中学校で102,940名であった。不登校児童生徒の割合でみると，小学校では302名に1名，中学校では35名に1名であった。平成17年度に比べと，小学校では1,115名の増加，中学校では3,363名の増加であった。これまでの調査では，平成11年度から小中学校とも不登校生徒数は減少していたが，今年度の調査で増加に転じた。不登校児童生徒が，増加した要因については，いくつか考えられる。その中で，小中学生ともに不登校になる要因として，共通していることは対人関係があげられる。対人関係は，集団生活を営むうえで必ず生じるものである。そのため，対人関係が苦手な児童生徒は，集団から離れ，孤立してしまうことも考えられる。そして，孤立した状態が長期間続くと，集団内での居場所がなくなり，その集団から離れるということが考えられる。この集団からの離脱現象の一つに不登校があると思われる。集団が不登校の要因として考えられる場合の不登校支援は，不登校にな

っている児童生徒だけを支援するのではなく，学校，クラス環境の整備，家族支援，その他の環境整備などを行うことが重要である。そのためには，学校の教職員だけでなく，スクールカウンセラーの活用も必要になってくると考えられる。

スクールカウンセラーは，現在，全国約1万校に配置されている。主な役割としては，児童生徒への心理的援助だが，教職員と協力して，問題解決にあたることも役割の一つである。そのため，教職員との情報交換は重要であり，スクールカウンセラーと教職員との関係が良好でないと，問題解決に支障をきたす場合がある。スクールカウンセラーは，学校内のカウンセラーであるため，学校組織を理解し，教職員との関係も考えることが必要である。また，派遣された学校の校風，教職員の問題行動への考え方，保護者の意識など学校に関連する様々な事柄について理解しておくことが大切である。さらに，相談者についての情報の扱いも考える必要がある。カウンセラーは，守秘義務があり，相談者の情報を外部に漏らすことはできない。しかし，スクールカウンセラーの場合は，教職員と連携して，児童生徒の問題を解決および改善していこうとするため，情報の共有は不可欠である。そのために，教職員とスクールカウンセラーが情報を共有できるような環境設定も，スクールカウンセラーの役割の一つだといえる。ただし，情報を共有する場合も，情報の全てを伝えることはできない。相談者は，スクールカウンセラーだから話した情報もあると思われるため，伝えても良い情報を精査して，教職員に伝えるようにしなければならない。また，教職員に伝える際には，相談者の了解をとることも忘れてはならない。これらのことを注意して，スクールカウンセラーだけの守秘義務ではなく，教職員とスクールカウンセラーの集団守秘義務として，情報を共有していくことが重要だと思われる。

学校内で起こる問題行動は様々あるが，不登校対応については，特にスクールカウンセラーと教職員が連携することが多い。不登校対応の多くが，本人への面接を通して，心理的負担の軽減をめざし，登校意欲の向上を目的としてきた。また，本人に面接できない場合は，保護者と面接し，保護者の心理的ストレスの低減をはかり，今後の対応などについて話し合いを行ってきた。しかし，長期間不登校になっている児童生徒は，学校に来ることはほとんどないため，本人と面接することができないことが多い。そのため，児童生徒が学校に来るのではなく，スクールカウンセラーが，児童生徒宅に訪問して，面接をする場合もでてきた。そこで，本論文では，不登校支援の一つしての訪問面接による効果について検討することとした。

Ⅱ 方法

1. 中学校の概要

中学校規模は，中規模校であり，校区は，農村地帯が多くを占めていた。また，校区内

には，複数の小学校があり，中規模ならびに小規模校の小学校が混在していた。

2.　面接対象生徒：中学3年生女子（以下Ａ子）

3.　訪問面接の実施期間および実施方法

X年5月からX+1年3月まで。基本的には，担任教師と一緒に訪問面接をしたが，担任の都合がつかない時は，スクールカウンセラーだけが訪問面接を行った。訪問面接は，スクールカウンセラーの勤務日に設定し，勤務時間内に行った。

ただし，保護者が不在の場合は，訪問面接は実施しなかった。そのため，Ａ子とスクールカウンセラーだけになることはなかった。

4.　訪問面接までの手続き

スクールカウンセラーが訪問面接するまでの手続きは以下の通りであった。

①　学校からの訪問面接の要請

②　担任教員の許可

③　訪問面接を行う上での保護者の許可

④　生徒の訪問面接の許可

⑤　訪問面接の実施

という流れであった。

まず，訪問面接を行う際には，学校からの要請がないと実施することは難しい。その理由としては，学校が家庭との窓口になるためである。そして，学校側に訪問面接に対する意識が高くないと継続することが困難になるからである。そのため，訪問面接を開始する前は，学校からの要請があった場合に検討する。次に，担任教員の許可が必要になる。これは，①と関連があるため，①とほぼ同じ意味になるが，担任教員に問題意識がない場合も考えられるため，担任教員の許可は必要であると思われる。また，担任教員と連携する上でも許可をとって訪問面接をすれば，学校での様子や家庭についての情報を共有すしやすくなるためである。そして，保護者，生徒自身の許可が必要である。訪問面接は，相手の家で実施するため，学校の相談室で行うカウンセリングとは多くの面で異なる。そのため，保護者および生徒自身の許可がない状態で訪問面接を実施しても，全く効果が期待できないことも考えられる。例えば，保護者は許可しても，生徒が許可してない場合は，家に行ったけれども生徒とは会えないということも考えられる。そのため，生徒に会えない訪問面接は，実施の意味があるとは言いがたい。スクールカウンセラーは，限られた時間に生徒と関わりを持つことが必要とされるため，生徒に会えないのであれば，訪問面接は実施することを控えた方がよいと思われる。そのため，生徒自身の許可があるかないかが，訪問面接を実施する上で最も重要な要素であると考える。そして，すべての許可が出た場合，訪問面接の実施形態について検討し，訪問面接を実施する。今回は，全ての段階で許可が出たため，訪問面接を実施した。

Ⅲ 面接経過

以下の文章では，スクールカウンセラーをＳＣと表記する。

1. 学期ごとの面接概要

１学期の概要：(＃1～＃11)

面接開始当初は，どこかよそよそしく，会話も途切れがちであった。また，うまく意思疎通が出来ないこともあった。しかしながら，面接を重ねるごとに，会話が続くようになり，意思疎通も徐々にではあるが，出来るようになった。

２学期の概要：(＃12～＃23)

夏休み中を含む計 12 回の面接を行った。一学期から面接を継続しているため，ＳＣ が来る日を覚えており，訪問面接を楽しみにしてくるようになった。また，これまであまり見られなかった，感情の表出が見られるようになった。

３学期の概要：(＃24～＃29)

３学期に入り，卒業式に向けての話しを少しする。しかしながら，反応はあまりない。卒業式も登校することができなかったが，自宅に卒業証書を持参すると，うれしそうな表情になる。また，自宅には，担任とＳＣ だけでなく，2 年生の時の担任と学年の先生が同行したが，嫌がる様子もなく，笑顔を見せていた。

2. 面接概要

以下の文章中で「」はＡ子の言葉，『』はＳＣ の言葉，＜＞は，その他の人の言葉とした。

① １学期：(＃1～＃11)

Ａ子は，自分から積極的に話すことはなく，こちらの問いかけに対して答えるとことが多かった。Ａ子の家には，動物が飼われていたため，動物の話をした。『家で何か動物は飼っているの』という問いかけに対して，「猫」と答え，『その他には，いないの』と問いかけると，「鶏」と答えるように，単語で答えることが多かった。鶏と答えたため，担任と一緒に鶏を見に行った。その際，部屋の中でいるより，外に出ている方が，表情も良かったので庭に出て話をするようにした。庭にでると，花が咲いており，その花を一緒に見た。また，家の周辺にある花も一緒に見に行った。外で話をするのは，＃2 以降も続いた。面接のほとんどが，ＳＣ からの問いかけに対して，返事をする状態であった。しかし，話の中で，行ってみたい場所についての話題が出た時は，Ａ子ははっきりとした口調で話をした。その行きたい場所について，Ａ子は色々調べており，ＳＣが知らない情報も知っていた。また，Ａ子は知っている情報について，詳しく話をすることができた。面接開始当初，母親や担任はＡ子に学校に行くように話をすると，Ａ子の表情がくもることが多かった。そのため，面接では学校の話は，必要以上にしないようにした。また，母親，担任とも話をし，学校の話がで

きそうな時は話をするが，必要以上に登校刺激をあたえないようにした。その後，母親にA子の家での様子を聞いたところ，時間が経つにつれて，表情も徐々に良くなり，会話も多くなったということであった。

② 2学期(#12～#23)

2学期にはいると，こちらの問いかけに対して，単語で答えるのではなく，具体的に答えるようになってきた。また，これまでは，買い物など家の外に行くことは少なかったが，この時期は，母親と一緒に買い物やレンタルビデオを借りに行くことも多くなった。さらに，映画館に行くなど，外での活動が多くなってきた。面接は，外ですることもあったが，部屋ですることも増えてきた。しかし，部屋の中では，口数が少なく長い会話は続きにくかった。また，担任，母親，A子，SCの4人で話しをするときも，A子が話しをすることはほとんどなかった。担任から何かを聞かれると，それに対する答えは言うが，頷いたり，「うん」と答えることが多かった。家での様子は，暴れたり，暴言を吐くということはなく，落ち着いているとのことであった。兄弟関係も1学期と比べて良くなってきているとのことであった。兄弟もA子の現状について理解しはじめ，以前のように口うるさく<学校に行け>と言わなくなってきたことも影響していると考えられる。母親との関わりでは，一緒に料理をつくるようになったとのことであった。家での手伝いは，ほとんどしていない様子だが，料理については楽しそうにしているとのことであった。

訪問面接としては，#19の時，A子の様子がこれまでと違っていた。それまでは，SCの質問に対しては，短いながらも何らかの返事をしていた。また，返事の内容も拒否的なものはなかったが，この回だけは，SCの問いに対して「もういいやん」といった拒否的な反応が見られた。会話も長く続かず，これまでになかった態度であった。そのため，今後の訪問面接について，継続するか一度中断するかを担任と話し合い，再度，訪問面接の方法について検討した。本人がSCや担任の訪問面接をしんどく感じているのであれば，訪問面接を中止し，母親との話に切り替えることにした。そこで，担任から母親にA子の様子について尋ねてもらったところ，嫌がっているということはなく，家でも特に機嫌が悪いことはないということであったため，訪問面接を継続することにした。しかし，#20も前回ほどではなかったが，A子の状態は良くなかった。ただし，会話の内容が前回より，改善された印象を受けたため，次回も訪問面接を行った。#21では，これまでの2回とは全く違う状態で，とてもA子の機嫌が良く会話も以前の状態に戻っていた。

③ 3学期(#24～#29)

3学期最初の訪問面接は，本人と会うことができなかった。その理由として，本人は，隣の部屋でテレビを見ていたが，訪問面接の時間が遅くなった関係で，いつも自分が見ている番組と重なったためだと思われる。また，この時期は，進路のことについても考えないとい

けないため，担任やＳＣと会うことをためらった可能性も考えられる。この回は母親と話しをしたが，内容は，進路のこと，将来について不安に感じていることであった。進路については，担任とこれからも話しをしていくこととし，母親の不安や焦りを少しずつ低減させるようにした。面接は，ＳＣと二人だけですることは少なくなり，母親，担任，ＳＣ，Ａ子が同じ部屋で話しをすることが多くなった。これは，外が寒くなったことも考えられるが，Ａ子の成長も影響していると考えられる。これまでは，ＳＣ以外の人がいると，その場から離れたいという様子であったが，この時期は，そのような様子は見られなかった。また，Ａ子が興味を持っている話題になると，話しの中に参加することもみられた。これらのことは，これまで見られなかったことであった。このような点からも，Ａ子の精神的な成長が認められると考えられる。

＃27では，卒業式の話しを担任がした。内容は，卒業式の日程や時間といった事務的なものであったが，Ａ子はあまり興味を示さなかった。＃28でも＜卒業式に来られそうだったら，おいでね＞という担任の言葉にも返事はなかった。卒業式当日，Ａ子は式に参加することができなかったため，卒業式終了後，２年生時の担任やＡ子を知っている複数の教員で訪問面接を行った。他の先生から＜卒業おめでとう＞といわれると嬉しそうな表情であった。雰囲気も終始和やかであった。母親も３学期当初の焦りや不安はなく，現状を受け入れている様子であった。

Ⅳ 考察

本論文では，スクールカウンセラーの訪問面接について検討を行った。今回の訪問面接による効果としては，時間の経過とともに対象生徒（Ａ子）の表情や雰囲気が穏やかになっていったことがあげられる。Ａ子は，２年生の後半から不登校になったが，母親によると，この時期は家でも落ち着きがなく，イライラした様子が多かったとのことであった。しかし，訪問面接が実施されると，落ち着いて生活できるようになり，イライラした様子も見られなくなっていったということであった。確かにＳＣとの面接の中でも，イライラしたり落ち着きがないことは，ほとんど見られなかった。また，表情もよくなっており，家族以外の人と関わることが，何らかの影響を与えていたことが考えられる。次に，母親とも定期的に会うことができたため，日常生活の様子を知ることもでき，Ａ子と家庭での様子を把握することで，今後の面接方針が立てやすく，Ａ子への関わりも考えることができた。さらに，担任も一緒に訪問面接を行ったことで，情報交換や面接の役割分担ができたことで，効率的な訪問面接が可能であった。以上のことから，不登校生徒に訪問面接を行うことは，一定の効果があることが考えられる。しかし，訪問面接を行う際の課題もあった。

まず，治療講造についてである。訪問面接の治療講造については，これまでも検討されて

きている(例えば，長坂，2006)。訪問面接は，一般的に行われる面接とは違い，相手の居場所の中にスクールカウンセラーが入って面接を行う。そのため，過度にクライエントの居場所の中に侵入しないように気をつけなければいけないが，全く侵入しないことも問題となる。そのため，訪問面接では，スクールカウンセラーの能動性と受動性が，バランスよく共存することが大切となる(長坂，2006)。そのためには，スクールカウンセラーは，相談者が発する言語的なものだけでなく，表情や雰囲気といった，非言語的なものを感じ取って面接を行うことが必要となってくる。次に，家族への影響についても考えなければならない。訪問面接を行う際，多くの場合，家族とも話しをする。その時に家族から「学校に行くようにすすめてほしい」や「学校に行かない理由を聞いてほしい」といったことを言われることがある。このようなことは，家族にとっては，大きな問題であり，知っておきたいことでもある。そのため，家族の気持ちも尊重しながら，スクールカウンセラーの立場を説明することが必要になってくる。もし，家族の要望を受けて，学校に行かない理由を詮索することが多くなると，クライエントとの関係が悪くなり，面接を継続することが難しくなると思われる。しかし，家族の気持ちを全く考えないような事をすれば，家族との関係が悪くなることも考えられる。そのため，クライエントと家族の両方に配慮しながら，スクールカウンセラーとしての立場を説明することが重要である。そして，立場をしっかり説明することは，スクールカウンセラー自身を守ることにもなる。また，面接を継続する上でも大切であるため，立場を説明することは，訪問面接だけでなく，多くの面接を実施するうえで欠かすことができない事であると考える。さらに，担任や学校との関係である。訪問面接を実施するためには，面接時間と行き帰りの時間があるため，一般的な面接よりも時間がかかる。そのため，時間設定をどのようにするかを打ち合わせておく必要がある。また，面接の内容について，どこまでを報告するかについても事前に打ち合わせておくことが重要である。以上のことが，訪問面接を行う上での課題と考えられる。しかし，いくつかの課題はあっても，スクールカウンセラーが訪問面接を行うことは，これから必要になってくると思われる。

これまで，スクールカウンセラーの活動は，数多く報告されており(早川，2002；岩倉，2003；小林，2005；中川，2005；中村，2004；佐藤，2006；武田，2005；竹森，2000；竹崎，2006；徳田，2000)，成果もあげてきている。このことから，今後もスクールカウンセラーへの期待および要望は，増加していくと思われる。しかし，不登校は「学校に来ないあるいは来られない状態」であるため，学校内だけでは対応に限界がある。そのためには，訪問面接も不登校支援の1つの方法として必要なことだと考える。ただし，訪問面接を行うには，まだまだ課題もあるため，すぐに実施できるものではないことも事実である。今後，一つずつ課題を解決して，訪問面接が実施できる環境を整えていくことが望ましいと考える。また，不登校を防ぐための試みもスクールカウンセラーの役割の一つであると思われる。例えば，不登校

になる要因の一つに対人関係があるため，対人関係の持ち方についての指導，ソーシャルスキルトレーニングなどを積極的に実施することも必要であると思われる。

このように，スクールカウンセラーの役割は，今後ますます多様化していくことが考えられるため，スクールカウンセラーの質を向上させ，多くの問題を改善できるよう努めていくことが重要であると考える。

引用文献

早川すみ江（2002）．スクールカウンセラーとして関わった不登校生徒との心理療法過程　心理臨床学研究，**20**，453-464.

岩倉拓（2003）．スクールカウンセラーの訪問相談　心理臨床学研究，**20**，568-579.

小林朋子（2005）．スクールカウンセラーによる行動コンサルテーションが教師の援助行動および児童の行動にあたえる影響について－周囲とのコミュニケーションが少ない不登校児童のケースから－　教育心理学研究，**53**，263-272.

文部科学省（2007）．平成18年度生徒指導上の諸問題の現状(不登校)について(8月速報値)　児童生徒課.

中川美保子（2005）．スクールカウンセリングについての一考察　心理臨床学研究，**22**，605-615.

中村恵子（2004）．スクールカウンセラーによる学習援助を中心にしたひきこもり生徒への登校援助　カウンセリング研究，**37**，336-344.

長坂正文（2006）．不登校への訪問面接の構造に関する検討　心理臨床学研究，**23**，660-670.

佐藤仁美（2006）．スクールカウンセラーと教師の協働　心理臨床学研究，**24**，201-211.

武田明典（2005）．スクールカウンセラーによる中学非行生徒への包括的支援－相談室の枠組みを超えて－　心理臨床学研究，**38**，385-392.

竹森元彦（2000）．スクールカウンセリングにおける，生徒，学校，家庭の支え方について　心理臨床学研究，**18**，313-324.

竹崎登喜江（2006）．スクールカウンセラーによる定期的な家庭訪問が教師の不登校対応に功を奏した事例　カウンセリング研究，**39**，281-289.

徳田仁子（2000）．スクールカウンセリングにおける統合的アプローチ　心理臨床学研究，**18**，117-128.

スクールカウンセラーによる訪問面接の効果についての検討

A study on the effect of visiting counseling by the school counselor.

Takehiro TAMAKI

The non-school attendance was considered to be a problem in diverse fields. Therefore most have been made about correspondence to non-school attendance. There is placement of school counselor. The school counselor was equivalent to a student of non-school attendance in cooperation with a teacher. However, a visiting counseling by school counselor is hardly reported. Thereat this study examined effect about a visiting counseling of school counselor. As a result, it became clear that a visiting counseling was effective.

[Key words: visiting counseling, non-school attendance, school counselor]